

## 聖婆伽梵歌

文學博士 高橋順次郎譯

聖婆伽梵歌が大史詩マハーブハラタの一節——たとへそれがやゝ後代の加入であるとしても——であつて、古來印度文學哲學史上最大雄篇の一として數へらるゝものである事は茲にいふまでもない、今度我國斯學の泰斗高橋博士の權威ある邦譯出づ、わが學界のために誠に慶賀に堪えない所である。

親族師友相戦はざるを得ざるを見て坐ろ悲痛の情に堪えず、同族戰爭の非合理なるを語り戰闘中止の決意をなしたるものを勵まし、利の戰爭の非なるを教へ、義の戰爭の避くべからざるを示し、王者の使命、天意の所在、自覺の根本を説きたる本篇は實に古代印度に於ける一戰爭文學としてのみ見るべきものにあらずして、現下の大戰に際し「義の哲學」として再思三省深くその涼味を掬すべき價値あるものと信ず、蓋し本篇は一面より見れば勿論一戰爭文學ではあるが、他面哲學書としては自ら一の奥義書を形成し、實行的倫理の教書としては瑜伽教典として之を見るべく、縱説横説瑜伽の實義を示し、交ゆるに梵の教義を以てし、遂に哲學と韻文との合融したる一大雄篇として慥かに印度思想の最高調を標示せる根本教典なりと見らるゝからである。

本篇は單に語學の方面より見れば別に難解といふ事はないが、その用語の内容、多含的な意味の如何に至りては實に深遠、哲學的、教理史的に印度思想を洞觀するだけの眼識なくんば到底その真意

を窺ふ事殆ど不可能とも謂ふべきものである、博士が將にその用語の解釋に周到なる注意を加へ、その主要なるものに就ては、詳細に説明の勞を執られたるその親切と、従つてその譯文の原意に忠實なる事とに對しては讀者は特に感謝の意を表さねばならぬ所であらうと信ずる。

本篇の用語中特に「瑜伽」「梵」「行作」等の意義の輕重よりして博士が「全篇に亘りて活動回避の無作を排し、利害打算の行動を斥け、正義の戰、本務の行を力説せり、本書が實踐倫理の教義を叙するを主としたるもの」にして「人生倫理の教書として本篇を繕くものにして初めて述作の眞意を得たるものと謂ふべきなり」とせられたる注意は讀者に取りて頗る意義あるものと言ふべきである。

本篇と佛教との關係に就ては古來大に議論のある所で、本篇を熟讀する際殆ど佛典を讀むの感ある所一再にして止まらぬ事は本篇を讀んだものゝ皆感する所であらう、しかもその相互關係の事實問題に至りては容易に判定すべからざるものがある、けれどもこの點に就ては、博士が「後日公にせんとせる小阿含經集の譯出に於て更に攷究」せらるゝ筈であるから、今暫く大なる期待と希望とを以てその世に出でん時を待つ事にする、(因に博士が本篇を譯出せられし所以は博士が近き將來に於て梵典與義書と佛典阿含經との全譯を試みんとせらるゝに方り、先づ兩文學の連鎖點とも謂ふべき實踐哲學の本文を博士の計畫に應じて譯出するの必要を感じられたからである)。

その他本篇と吠陀との關係、クリシュナとアルジュナとの尊號、本篇内容の分類説述等、讀者に對し頗る親切なものである事を忘れてはならぬ。

最後に私は將來益々多く是の如き有益なる事業がわが學界のために權威ある博士の力によりて成し遂げられん事を御願する次第である。

譯本の内容——凡例——序——(一)大史詩「マハーベータ」に於ける聖婆伽梵歌——(二)聖婆伽梵歌の用語——(三)聖婆伽梵歌の内容——(初)倫理篇(王者の使命)——(中)神理篇(天意の所在)——(終)心理篇(自覺の原理)——本書三篇十八章七百頌邦譯。(注意——別に「梵文婆伽梵歌」別冊として公行せらる——定價六十錢)。

發行所東京丙午出版社、三六版二一五頁、定價壹圓(本田義英)

### 寄贈書籍雜誌

- 聖婆伽梵歌 文學博士 高楠順次郎譯 丙午出版社
- カニ 實證理性批判 文學博士 波多野精一 共譯 岩波書店
- ト 日本基督教史 下 文學士 宮本 和吉 譯
- 哲學雜誌、思潮、丁酉倫理講演集、心理研究、六合雜誌、東洋哲學、東亞之光、無盡燈、早稻田文學、學校教育、教育、普通教育、内外教育評論、教育研究、教育界、教育時論、東京教育、兵庫教育、京都教育、愛知教育雜誌、宮城教育、靜岡縣教育、奈良縣教育、滋賀縣教育、岐阜縣教育、三重縣教育、都布教育、信濃教育、佐賀縣教育、山形縣教育、秋田縣教育雜誌、第三帝國

### 前 號 目 次

心情の無限	文學士 西 晋 一 郎
感 情	文學博士 西 田 幾 多 郎
司馬遷の經學	文學博士 狩 野 直 喜
心理學と客觀的方法	文學士 榎 崎 淺 太 郎
識別作用の非相稱性に關する實驗的研究(承前)	文學士 千 葉 胤 成
彙報——新著紹介	